

着地型観光と地域社会

—世界遺産登録地を事例として—

伊木稔 飯田耕二郎 長妻三佐雄 横見宗樹

はじめに

近年、わが国の観光市場は「着地型観光」の時代を迎えている。着地型観光とは地域主導による観光資源の創出・企画・商品化を意味する。観光や余暇市場の成熟化により、マス・ツーリズムを基本とした従来型の観光旅行は転換期を迎えている。着地型観光に関する既存研究は未だ萌芽的な域に留まるものの、肯定的文脈から捉えられることが一般的である。しかし、着地型観光をめぐる状況は必ずしも観光振興と地域経済の発展というプラスの側面のみではない。すなわち、観光地化による地域コミュニティの分断や観光開発による環境破壊など、マイナスの側面も否定できない。

本稿では、わが国の世界遺産に登録された観光地を事例として、着地型観光が地域に与える影響を多面的に考察することを目的とする。世界遺産とは、本来はユネスコ（UNESCO）の世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）に基づき、保護や保全を図ることが目的である。しかし現実には、世界遺産の登録地域は観光地として一躍脚光を浴びることになるため、その経済効果を取り込もうとする観光事業者、これに対して環境保全を訴える地域住民、その両者を仲介する行政組織など、様々な主体が互いの思惑を交錯させることになる。すなわち、着地型観光と地域社会との関係を考察するうえで、世界遺産の登録地域は先進的なモデルになると考えられるのである。

考察の手法は、行政、観光事業者、観光客、地域住民に対する多層的な実地調査（ヒアリング等）の蓄積を中心とする。これにより、着地型観光が及ぼす効果と課題を俯瞰的に導出する。事例として取り上げるのは、文化遺産として「石見銀山遺跡とその文化的景観」、自然遺産として「屋久島」、文化遺産でありながら自然と文化の複合的要素を併せ持つ「紀伊山地の霊場と参詣道」の3地域である。

着地型観光ならびに世界遺産を主題とした既存研究と比較した本稿の特徴は、学際的といわれる観光学の領域において、各章の執筆担当者が、それぞれの専門分野である、地域文化論（伊木） 地理学（飯田） 日本思想史（長妻） 観光学（横見）の視座から共同で現地調査を実施し、石見銀山・屋久島・紀伊山地で収集した資料と観察・体験をもとに考察を加えたことである。そのため、共通の認識に基づきながらも各章ごとに視点が異なり、主張・論点に筆者間の独自性・差異が反映していることは否めない。それは世界遺産に対して先入観を抱かず、多様な視点から一定の距離を置いて検討しようとした結果であり、各章の揺らぎこそが、この共同研究のユニークさを示しているのではないかと考えている。

こうした考察を経ることで、従来の観光学ではとらえきれなかった着地型観光の光と影を明らかにする。

1. 世界遺産としての石見銀山 その歴史と風土（飯田耕二郎）

1.1 歴史的意義

2007年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産に登録されたが、最初にその歴史的意義について考えてみよう。

石見銀山の本格的な開発が始まるのは戦国時代、周防国（山口県）の大内義興が石見国の守護職にあった1526年で、博多の商人である神屋寿禎と銅山主の三島清右衛門によって見出された。そして1533年に朝鮮半島から「灰吹法」という銀製錬技術がもたらされ、爆発的な銀生産を可能にした。灰吹法は、アマルガム法における水銀の代わりに鉛を使う。鉛と銀の合金を造り、それを灰を敷きつめた床の上に置いて加熱し、融点の低い鉛を灰に吸収させて、銀を分離する。石見銀山では鉛も大量に産出したので、この方法が適していた。

この技術革新が目覚ましい銀の増産を実現していった。1545年、南米のポトシ銀山（現在ボリビア、1987年に世界文化遺産に登録）発見の数年前より、石見では膨大な銀の産出があった。灰吹法はまもなく生野（兵庫県） 佐渡、院内（秋田県）などの鉱山に伝わって、空前のシルバーラッシュが起こった。江戸時代の初め、日本の銀生産高は、年間15万キログラムに達し、世界全体の3分の1を占めたと試算されている。そして石見

からは日本の産出高の5分の1を占めていた。

さて、石見銀山での採掘は、はじめは露頭につき出ている銀鉱石を採掘するため、仙ノ山（石銀地区）の頂上付近で作業が行われていた。今でも間歩（まぶ・坑道）や吹屋（製錬所）などの跡が残っており、当時の様子を知ることができる¹⁾。

大内氏、尼子氏を経て毛利氏が1562年に石見国を平定すると、銀山と温泉津を直轄地とした。当時、毛利氏は石見銀山を「温泉銀山」と表現しているが、これは銀山と温泉津を一体のものとして把握していたことを示す。温泉津は古くから知られた良港で、毛利氏は銀の輸送や兵糧米などの物資の搬入のため、銀山とともに温泉津を掌握した。1570年には海上防衛のため沖泊に城を築き、通過する船には通行税を課していた。毛利氏の銀山支配は1600年の関ヶ原の戦いが終わるまで38年間続き、この期間が最も安定した発展時期であったという。

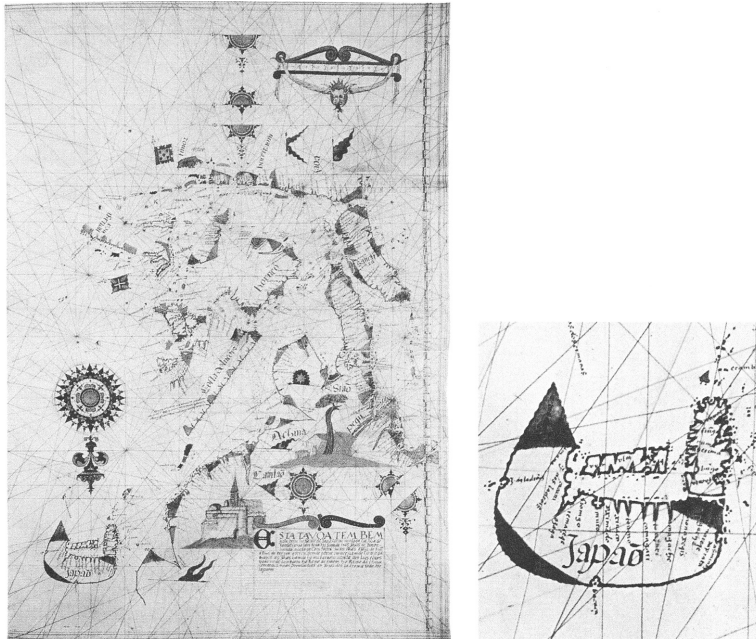
戦国時代、石見の銀は博多に運ばれた。当時の博多は日本最大の国際貿易港で、周防山口の大内氏や豊後（大分県）府内の大友氏ほか海外貿易を広く行った大名らが支配していた。銀はこの博多から朝鮮半島あるいは東シナ海航路を經由して中国をはじめとするアジア大陸諸国へと輸出されていった。そしてこのような動きは、すでに中国南部に進出していたポルトガル人の知るところとなった。ポルトガルは、1511年にアジア海域最大のターミナルであるマラッカ（マレーシア領）を占領して、東アジア進出の手がかりをつかみ、1540年代に日本列島まで到達した。

1549年、ポルトガルの拠点があったインドのゴアから日本に到達しキリスト教を伝えたイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが、1552年、ポルトガル本国リスボンのロドリゲス神父に送った書簡には、「スペイン人はこの島（日本のこと）を『銀の島』と呼んでいます。」また「日本のほかには銀がある島々は発見されていません」と記している。この時点で、「銀の島」を印象づけた銀の多くは、石見銀山の銀であったに違いない²⁾。ポルトガルは、日本の銀を使って貿易を行い、莫大な利益を得ることができたのである。この頃、日本に鉄砲やキリスト教、また服装や食べ物などヨーロッパの文化が伝わっていわゆる南蛮文化が開花したが、それは銀を媒介とする貿易が大きなきっかけだったともいえる。日本の銀鉱山の情報は、当時のヨーロッパ人が描いた日本地図にも記載されている。その例として『石見銀山展』の図録より次の2つの地図を紹介しておく。

① 「ラザロ・ルイス／東アジア図」1563年（図1-1）。

地図の左下（方位では北東隅）に日本がみえる。エビ型の日本を描いた最初の地図であり、以後50年間にわたりこの形が採用された。石見の付近（エビ型の右下）にポルトガル語で「as minas da prata」（銀鉱山）とある。

図1-1 ラザロ・ルイス／東アジア図



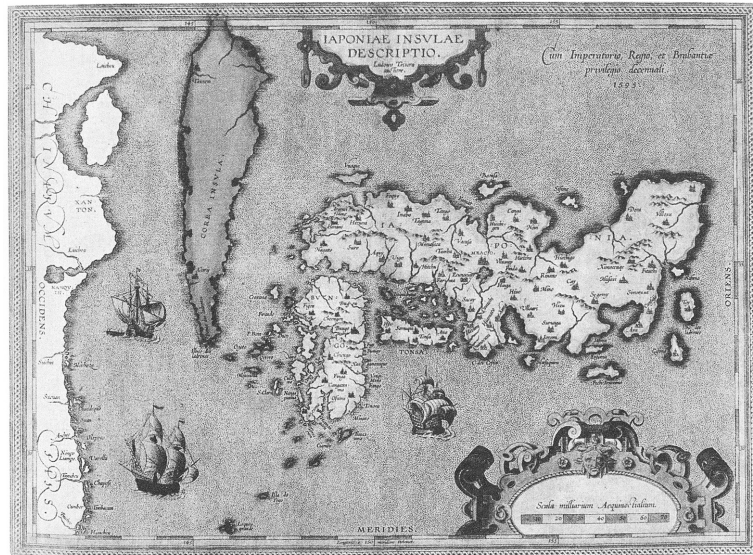
注）左図左下の「日本」を拡大したものを右図に示している。
（出所）石見銀山展実行委員会編（2007）19頁。

② 「ティセラ／日本図」1595年（図1-2）。

日本海側、「Hiwami」（石見）付近にラテン語で「Argenti fodin ae」（銀鉱山）とある。

前述のように、石見銀山の発展の影響を受けて、生野銀山や佐渡金銀山はじめ、国内各地の金銀山が開発された。その結果、16世紀から17世紀の初頭にかけて日本は世界有数の銀生産国になった。17世紀になると、生野や佐渡など後発の金銀鉱山の情報もヨーロッパに伝わり、ポルトガルやスペインだけでなく、オランダやイギリスも日本の情報を入手し、日本への航路を向けるようになった。

図1-2 ティセラ／日本図



(出所) 石見銀山展実行委員会編 (2007) 20頁。

17世紀には、日本の銀は灰吹銀、ナギト銀（長門銀）、タジモンプレート（但馬銀＝生野銀山の銀）、セダ銀（佐渡銀）、ソーマ銀（佐摩銀）などいくつかの種類の銀が貿易に用いられている。そのうちソーマ銀は石見銀山の所在する佐摩村の地名に由来すると考えられている。

以上のように、日本で初めて石見銀山に1533年に灰吹法が導入されてシルバーラッシュが起こり、その存在が遠くヨーロッパに伝わり、地図などによってさらに広くヨーロッパに広がったことが知れる。石見銀山は大航海時代の世界の中で注目される存在であり、その歴史的意義は大きい。

1.2 伝統的技術と文化的景観の保存

石見銀山では採掘から製錬までの作業が、すべて人力・手作業で行われた。このような集約的な作業と生産単位が多数集まることによって、高品質の銀を大量に生産することができた。製錬では炉の構築をはじめ、多量の燃料や製錬道具・資材が必要とされたが、これらはすべて銀山やその周辺から入手される仕組みになっていた。

このように江戸時代の石見銀山では従来の伝統技術による銀の生産が続けられた。し

かし明治期の近代以降、ヨーロッパの産業革命で発達した新技術が各地で導入されたが、石見銀山では鉱石が枯渇したため、鉱山活動が停止してしまった。その結果として、石見銀山には伝統的な鉱山開発の遺跡が良好に残されることとなった。

石見銀山遺跡には、採掘から製錬まで行われた鉱山跡を中心に、これを軍事的に守った周囲の山城跡、銀や物資の輸送路である二本の街道、銀を積みだした港湾、また銀山の操業によって栄えた鉱山町や港町がよく残り、今日でも地域住民の生活の場となっている。

また石見銀山とその周辺では、かつて製錬に必要とされた膨大な木材燃料の供給が、適切な管理のもとに行われたため、今日でも豊かな山林を残している。

以上のように、鉱山に関係する遺跡と豊かな自然環境が一体となって文化景観を形成している例は極めて少なく貴重といえる。さらに筆者の個人的な感想として、技術的にはこの地域の付近で古くから行なわれてきた「たたら」製鉄の技術の影響があり、また鉱山遺跡や自然環境の保存に関しては、この地域で近代以降の産業開発がなされなかったことが幸いしたのではないかと考える。

1.3 世界遺産登録への過程

石見銀山は明治時代の1887年に大阪の藤田組により大森鉱山として経営が再開されるが、1923年に休山となる。第二次大戦後の1957年、大森町が大田市との合併を契機に町内の全戸の人々が加入する「大森町文化財保存会」を結成し、遺跡の保存・保護を中心に活動を行ってきた。また、1969年に石見銀山遺跡が国指定史跡となると、大森小学校の全校児童で「石見銀山遺跡愛護少年団」が結成された。さらに1976年には地元の熱意により、解体が予定されていた代官所跡の旧邇摩郡役所の建物が大森町観光開発協会に無償で払い下げられ、石見銀山の資料の保存、調査、研究の拠点として石見銀山資料館が整備された。このような文化財を保護する中で、1987年には大森町の街並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

また学術研究として、1993年より発掘、科学、石造物、文献、民俗などの総合調査が実施され、とくに発掘調査では、石銀（いしがね）地区において生活道具や銀製錬に使用した道具が発見された。こうした調査成果を踏まえ、石見銀山遺跡は2001年に世界遺産暫定リストに登録された。その後、温泉津の街並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたり、山城跡や街道、港湾集落も国史跡に追加指定になるなど次々に遺跡

の保護が進められ、2006年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産登録推薦書がユネスコに提出された。2007年に一時は登録延期勧告を受けたが、7月に世界遺産委員会において世界遺産に登録された。

1.4 世界遺産登録後の地域に与えた影響および諸活動

私たちは、2011年9月1日に大田市観光協会を訪れたが、その際に担当の田原博氏（事務局長）よりいただいた資料などによって標記の内容についてまとめてみたい。

まず地域に与えた影響として、新しい店舗が増えたことによる雇用が拡大した。そして、世界遺産センターなどの施設・店・トイレなどインフラが整備された。草刈りなどの清掃活動や遺跡保護などボランティア活動が以前からの地域住民だけでなく地元企業も増えた。マスメディアの取材が増え、観光客の増加と土産や食べ物に関する問い合わせが多くなった。

次に観光の状況は、登録後一気に観光客が増加したが、それに伴い当然ながら、バスの増便・混雑・騒音・振動・排気ガスなどの問題が発生した。また、途中で小学校の通学路があり交通事故の心配から、住民からの要望で間歩方面への路線バスが2008年10月より休止となって、歩く観光に切り替えることとなった。そして、石見銀山について理解してもらうため、音声ガイド機の貸し出しを大田市観光協会、石見銀山世界遺産センター内観光案内所で行っている。日・英・中・韓の4か国語でガイドポイントは60カ所、料金は500円である。

さらに住民の活動については、前述のようにすでに1957年に大森町の全戸加入による「大森町文化財保存会」が設立され、全町民が遺跡の美化清掃活動を続けている。また1969年には「石見銀山遺跡愛護少年団」が結成され、現在小学生が18人いる。子供たちが地元の遺跡の清掃や探索を体験することにより、自らが文化財の伝承人として成長することを目指している。「石見銀山ガイドの会」は、地元の有志によって2000年に結成された。当初は無償のボランティアガイドとして20名程度で活動していたが、プロのガイドとして責任と誇りをもって活動に取り組みたいとの会員の思いから、2006年より有償化に踏み切った³⁾。現在は70名程で退職した教員が多い。ガイドコースや料金などについてはホームページが存在する。

1.5 現在の観光について

石見銀山遺跡は、銀の生産から搬出に到る鉱山経営の全体像を示すもので、そのエリアは銀鉱山遺跡と大森・温泉津の2つの歴史的町並み、銀を積み出した鞆ヶ浦・沖泊の2つの港と港町、鉱山と港をつなぐ街道であり、世界遺産に登録されている範囲は核心地域のみで442ヘクタールにおよんでいる⁴⁾。これだけの地域を巡るのは大変であるが、そのうち観光の中心は、銀山で栄えた町並みが残る大森地区と、坑道跡や製錬所跡など多くの史跡が残る銀山地区、かつての銀の積出港であった温泉津で、温泉をもつ唯一の世界遺産といわれている。私たちは3日間でこの3地区を車で回ったが、全体の印象として落ち着いた環境で、一部の世界遺産で問題になっている観光客がどっと押し寄せる過剰利用と呼ばれる感じではなかった。とくに最大の坑道跡である大久保間歩を見学した際は、あいにくの雨の中ということもあり、秘境の雰囲気さえ漂わせていた。このような環境を作り出したのは、これまで述べたような地元の人たちの息の長い遺産の保護と地域の活性化を支える努力の結果であり、またそのことが今後の課題であると思われた。まさに「いぶし銀」の技といえよう。

2 . 地域の宝を守るもの 石見銀山の町並みと屋久島の自然（伊木稔）

2.1 住民が守る文化的景観

2.1.1 銀山の玄関として栄えた大森の町並み

2007年、石見銀山がユネスコの世界遺産に登録された際の正式名称は「石見銀山遺跡とその文化的景観」となっている。産業遺跡としての銀山遺跡の歴史的価値とともに、銀山を中心として長年にわたって形成された景観が「自然と人間との共同作品」として高く評価された。

金田章裕によれば、「文化的景観とは、その地域の環境に対応しつつ、歴史を通じてかたちづくられたものであり、文化そのものの一部である。したがって、その地域における人々の生活と生業を物語っている」⁵⁾のである。

石見銀山の場合、その文化的景観はおおむね①鉱山跡と鉱山町②銀山街道③港湾と港町から構成されるが、世界遺産登録との関連でもっとも重要な位置を占めるのは①の銀山跡そのものと鉱山町の玄関として栄えた大森地区の町並みである。大森地区は、江戸

時代には幕府直轄地として代官所が置かれ、武家・商家・社寺等が集中してにぎわった。しかし明治以降、鉱山は近代化されることもなく休山となり、玄関口の大森地区も徐々にさびれていった。

今日、大森地区の人々は、「石見銀山が近代化されず、町に開発の波が押し寄せなかったことがかえってよかったのかもしれない」と語る。自然と共生しながら人間の手で掘った中世～近世の鉱山の様子がよく残り、鉱山とともに栄えた町の生活と生業を伝える町並みも維持されたからである。

ここでは、銀山閉鎖後も、厳しい環境のなかで生活と生業の営みを続け、住民が守ってきた大森の町並みを取り上げる。北の端にある代官所跡の石見銀山資料館から、南の銀山公園あたりまでの1キロ足らずの細長い町並みである。銀山川に沿った谷あいの町で、周りは山に囲まれている。かつての武家屋敷や大小の商家・町屋が混在しながらも調和して、屋根瓦も美しく端然とした町並みを形成している。観光客向けの飲食店や雑貨屋も点在するが、町並みに溶け込んで落ち着いた佇まいである。観光協会、石見銀山資料館はじめ、飲食店や雑貨屋のお店の人たちのもてなしにも、石見銀山と大森の町に対する誇りと愛着が感じられる。

2.1.2 町並み保存の歩み

1923年の銀山休山後、谷あいの農地も少ない大森の町は人口減少の一途をたどり、戦後は急速に過疎化が進んだ。そうした時代の厳しい流れの中でも、大森に住む人々の心の中には石見銀山への誇りと郷土愛は根付いていた。前章でも述べられているとおり、1957年には、大森町の全戸が加入して「大森町文化財保存会」が民間の手で結成され、銀山遺跡の清掃や歴史の学習・説明板設置等の保護活動が続けられた。その後も、「大森町観光開発協会」や「文化財愛護少年団」の発足など、住民による活動が芽生えている。

他方、国の文化財保護行政も単なる文化財だけでなく、歴史的・自然的景観の一体的保護にまで拡大し、1975年の「伝統的建造物群保存制度」の導入に見られるように、町並み保存の観点が重視されるようになった。こうした機運の中、文化庁の主導で大森地区の町並み調査が実施され、それにもとづき保存状態のよい7件の歴史的建造物が県の文化財として指定された。

1976年、大田市から旧代官所跡の建物を取り壊したいとの話が持ち上がったときに

は、「大森町文化財保存会」で検討の結果、住民が資金を出し合って買い取り、古い建物をそのまま「石見銀山資料館」として活用している。

1980年代になると、行政主導で「石見銀山遺跡総合整備」と「町並み保存」計画が進められ、そのための町並み調査も行われた。それまでの経緯から、行政主導の町並み保存に不安を抱く住民たちは、1986年に住民挙げて「町並み保存対策協議会」を結成し、住民の要望にもとづいた取り組みを推進し、行政側にも積極的に働きかけた。こうした動きを踏まえて、1987年には大田市の保存条例が制定され、さらに大森の町並みは国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、以後重要な歴史的建物や町並みの保存・修理・修景が住民の声を反映しながら進むことになる。

1991年には、地元住民・行政・外部有識者を交えた「町並み討論集会」が開かれ、大森の将来像について活発に議論が展開され、石見銀山と大森の町の魅力を広く情報発信する契機となった。そして、その後の全国各地域・各界との交流や空き家の活用等が進展することにつながっている。

2.1.3 町づくりの住民リーダー

今日、人口500人にも満たない山間の小さな町大森に本拠を置き、全国に名を馳せるオンリーワン企業が二つも存在する。そのひとつが優れた義肢装具メーカーとして世界的に著名な「中村ブレイス」であり、他方がナチュラルなデザインの「群言堂」ブランドで知られるファッション企業「石見銀山生活文化研究所」である。「中村ブレイス」の中村俊郎社長と「石見銀山生活文化研究所」の経営者、松場大吉・登美夫妻はいずれも単なる企業家・経営者というイメージではとらえきれない。それぞれのビジネスを通じて大いに地域経済に寄与しているが、それ以上に大森の町並み保存や町づくりのキーパーソンとして大きな役割を果たしている。以下では、本調査でインタビューを行った中村俊郎、松場登美それぞれの大森の町への思いと活動について述べる。

(1) 世界遺産への夢 中村俊郎

中村ブレイス本社の応接室で、中村社長が私たち調査チームにまず見せてくれたものは、昭和30年代頃の人通りのないゴーストタウンのような大森の町の写真と、高校を出て京都の大井義肢装具製作所に勤めていた頃、ふるさと大森への望郷の念を綴った雑誌「旅」への寄稿文である。ふるさと大森をなんとかしなければという強い思い

が、彼の原点であり、これまでの人生の根底を貫くものであることが伝わってきた。それはまた、世界に誇るべき石見銀山の歴史的価値を熱く語った父からの影響でもあり、文字通りのDNAでもあった。

したがって、2年半に及ぶアメリカでの義肢製作の修業を終えて帰国した1974年、過疎の町大森を起業の地に選んだのも、彼にとっては当然のことだったのだろう。自宅の前にあった古い納屋を作業所としてスタートした中村ブレイスは、義肢装具を必要とする人の身になって、最適のものを開発し製作するという姿勢で着実に業績を伸ばし、今日では約70人の従業員を擁するまでになった。海外からもオーダーが多く寄せられるようになったが、中村ブレイスの事業の一番の原動力は、利用客から寄せられる感謝の言葉だという。

社長業のかたわら、中村俊郎は石見銀山に関する資料の収集に余念がない。私的なコレクションは、大田市内にあった山陰合同銀行の旧支店の古い建物を大森に移築・改修した「なかむら館」に収蔵している。彼はまた、本社に隣接する石見銀山資料館の理事長も務め、建物老朽化にともなう改修工事を中村ブレイスの地域貢献活動の一環として行なっている。

かつて幕府の天領であった大森には、伝統的に行政に頼ることをよしとしない自立の気風があることを強調し、町並み保存のために、自ら率先して古民家の買取・改修に積極的に取り組んでいる。創業37年を迎えた2011年現在、すでに37軒の買取・改修を終えたという。単純に計算すれば、1年に1件のペースである。改修を終えた建物には、飲食店や物販店が入り、また同社社員のための社宅として活用されるなど、空き家対策としても功を奏している。

県の教育委員会委員長として活躍した中村にとって、石見銀山の世界遺産登録は積年の大きな夢であった。当初は地元住民の足並みもそろわなかった状況から、獅子奮迅の努力を傾け、国や県・市との連携プレーにより2007年の登録申請にまでこぎつけた。ところが、イコモスの事前審査により「登録延期」の勧告を受け、一時は無理かと思われたが、ニュージーランドのクライストチャーチで開催された世界遺産委員会で、逆転登録が決定したのである。日本代表団の一員としてクライストチャーチに乗り込んだ中村にとって、最後まであきらめなかった夢が実現したときの感慨は筆舌に尽くしがたいものだったにちがいない。「夢を語り、誠実さを伝える」を信条とする彼は、世界遺産登録の経験を踏まえ、「どんなに厳しいときでも、何か一本の光があ

れば、小さくとも灯があれば、たどりつくことができる」⁶⁾とその信念を吐露している。

石見銀山の世界遺産登録に向けての中村の献身的努力は、その過程において「功名心」や「ビジネス上のメリット」等、さまざまの誤解や憶測を呼んだこともあるという。たぶん、それは彼の故郷への熱すぎるほどの郷土愛と不屈の行動力が、常人の理解をはるかに超えていたためだろうというのが、ヒアリング後の筆者の印象である。

そのことは、世界遺産登録は最終目的ではなくひとつのプロセスとして、登録後も彼と中村ブレイスが地域社会のために大きく貢献していることにも現れている。町並み保存のための古民家の改修・活用事業の一層の促進や、世界遺産登録の翌年からスタートした「石見銀山文化賞」による地域文化に尽力した人に対する顕彰活動などがその端的な例であろう。

(2) 復古創新 松場登美

株式会社「石見銀山生活文化研究所」の創業は1981年、松場夫妻がそれまでの名古屋での生活を切り上げ、夫大吉の故郷大森へ帰郷したことから始まった。当初の仕事は、夫の実家の呉服店を手伝うかたわら始めた、端布を利用したパッチワークの袋物などの小物づくりだったという。田舎の暮らしに立脚した松場登美の思いをこめた手作りの雑貨が徐々に都会の人に受け入れられ、「群言堂」ブランドの衣料品へと発展してきた。「復古創新」をモットーとし、大森の風土にしっかりと根をおろしながら、時代の波を超えるデザインとものづくりを続けている。創業時は有限会社松田屋としてスタートしたが、1998年に株式会社石見銀山生活文化研究所を設立し現在に至っている。

従業員120名を超える規模となった同社の本社社屋の外観は簡素で、隣接する茅葺き屋根の社員食堂「ひなや鄙舎」ともども町の景観に溶け込んでいる。「鄙舎」の建物は、わざわざ広島から古民家を移築したものである。

松場登美によれば、大森を訪れる他地域や外国人など外の人の指摘や意見が、田舎の暮らしの価値の発見につながり、住民のふるさとへの自信と誇りを生む触媒になるという。群言堂の仕事にも、東京を始めとする都会からやってくる知識人や、中国やタイからの留学生との交流から生まれたアイデアを大いに活用している。

松場登美の「復古創新」を象徴する事業が、「他郷 阿部家」の営みである。阿部

家は200年以上も前に建てられた武家屋敷で、県の文化財にもなっている。ところが30年以上も空き家になっていたために、ボロボロに朽ち果て廃屋同然になっていた。これを買取り10年もの年月をかけて丁寧に修復していき、ようやく人が住めるまでに再生した。今では松場登美がここに住み、自然と季節に調和した昔からの暮らしの知恵を活かした生活が営まれている。2008年からは、宿泊施設として営業し、1日数人の宿泊が可能となり、筆者一同も4人で泊めてもらった。

「他郷」とは、「他郷遇故知」という中国の言葉から取ったもので、「異郷の地で自分のふるさとに出会う」という気分になる宿をめざしている。実際、門も、前庭も、玄関もさりげなく、ごく自然に入ることができ、しかも落ち着いたたたずまいとなっている。どの部屋も古いながらも美しく、凛とした風情がある。蔵を改造した寝室も納屋の跡に作られた風呂場も、どこか懐かしい気分になる設いである。しかしながら、何よりアットホームに感じたのは、かまどのある台所での土地の産物を活かした素朴でおいしい料理とホステス役の松場登美や阿部家のスタッフたちを交えての語りというもてなしであった。

大森の静かで豊かな山里の暮らしを大切にする松場夫妻にとって、石見銀山の世界遺産登録への動きは、町並み保存にかえてマイナス面のほうが大きいのではないかと思われた。観光客や観光関連施設の急激な増加が、住民の生活や町のたたずまいを壊すのではないかとの危惧を住民有志とともに表明したのである。

今では、松場登美は、石見銀山が世界遺産に登録されてよかったと考えている。何より石見銀山と大森の町が全国・全世界に注目されることには大きな意義がある。登録直後に観光客が急増し、一時は住民の生活も脅かされたが、松場夫妻らの危惧の声は決して無駄ではなく、行政的にもさまざまな措置が取られることにつながったといえよう。

たとえば、銀山遺跡まで直行する観光バスは禁止となり、パークアンドウォーク方式で観光客は駐車場から遺跡まで歩くことになった。また、駐車場や世界遺産センターなどの関連施設も、町並みとの距離に配慮して設置されたり、観光客や地元住民が守るべきマナーやルールが「石見銀山ルール」として、地元の合意の下に策定されたりしている。

阿部家でのヒアリングの場で、松場登美がさりりと語った次の言葉が心に残った。「住民リーダーの役割として、先頭で旗を振ることよりも、共に歩む住民に対して後

るから励ましの声をかけることが大切ではないか」

2.1.4 郷土を見る「鳥の眼」と「虫の眼」

以上見てきたように、大森地区町づくりの代表的キーパーソンといえる中村俊郎と松場夫妻では、テクノロジー型とデザイン型という企業の業種・ジャンルの違いと同様に、町づくりの発想においても隔たりがあるように見える。たとえば、中村俊郎は、石見銀山の歴史的価値を、空高く飛ぶ「鳥の眼」で見て、広く全国・全世界にアピールすることに思いを馳せ、全力を傾けてきた。他方、松場夫妻は、大森の土をしっかりと踏んで這う「虫の眼」を持って足元を見つめ、石見銀山の昔から続く暮らしの知恵を発見し、それを郷土の誇りとして現代に活かしてきた。

しかし第三者の眼から見ると、案外両者の共通点も多いのである。まず第1に、いずれも若い時期に故郷を飛び出し、都会であるいは海外で時代の空気に触れ、貴重な経験を重ねて、それをバネに故郷大森で事業を起こし成功したことである。第2に、中村の信条が「夢を語り、誠実さを伝える」ことであり、松場登美のモットーが「心想事成」つまり「心に想うことが成る」で、いずれも夢を大切にしておきめなないという姿勢が共通している。第3に、小さくとも全国・世界に通用するオリジナリティをもった、地域に根ざしたビジネスのスタイルが共通しており、企業として町並み保存等の地域社会への貢献活動に力を入れている点も同じである。第4に、ビジネス以外の分野でも幅広い人脈・ネットワークを持ち、積極的に他の地域や各界の専門家との交流を行っていることである。ここから新しい観光の形が生まれるかもしれない。第5に、両者いずれも誰にも負けない郷土への愛着と誇りを持ち、次の世代へ伝えようとしていることである。

この最後の点が重要であり、郷土大森への思いが共有されている限り、それぞれの進む方向が多少異なっても、郷土愛を共通の原点としてベクトルは合成され、次世代へと受け継がれて、さらなる大きな力になっていこう。たとえば、現在両者が別々に進めている古民家の買い取り・改修活動についても、いずれもっと相乗効果が発揮されるような時が来るかもしれない。

他方、行政との連携という点では、誇り高く自立心の強い大森の住民も、これまでの長年の町並み保存活動の蓄積の上に、新しい時代にふさわしい協働関係を構築していくものと考えられる。すでに世界遺産登録を契機に、「石見銀山協働会議」が発足し、民

間・行政の協働によって、世界遺産の価値を守り、活かし、伝える取り組みが着実に進められている。

観光客も、世界遺産登録時にはそれ以前の2倍以上の年間70～80万人が石見銀山地区に押し寄せたが、数年を経て50万人前後に落ち着いてきている。それでも登録以前の30万人台とくらべれば高水準であり、世界遺産登録の効果だと考えられる(表2-1)。今後とも、民間・行政の協働によって、銀山地区だけでなく、近隣の銀山街道や温泉津地区を始め、地域挙げての連携による受け入れ態勢を整えていけば、派手な観光地にはならずとも、「滞在・学習・体験・交流・エコロジー」といったキーワードで示される新しい着地型観光の拠点になる可能性は大きい。

かつて世界に誇る「銀という宝」を産出した石見銀山が、21世紀に「文化的景観」としてよみがえり、「鳥の眼」、「虫の眼」ばかりでなく「魚の眼」、「獣の眼」など、より多様な眼を持った、世界に誇る「人材という宝」を輩出する舞台となることが期待される。

表2-1 石見銀山地区観光客数の推移

年	入込み客数(人)	前年比(%)
2004	318,000	102.58
2005	340,000	106.92
2006	400,000	117.65
2007	713,700	178.43
2008	813,200	113.94
2009	560,200	68.89
2010	504,800	90.11
2011	498,700	98.79

(出所) 大田市(2011)より筆者作成。

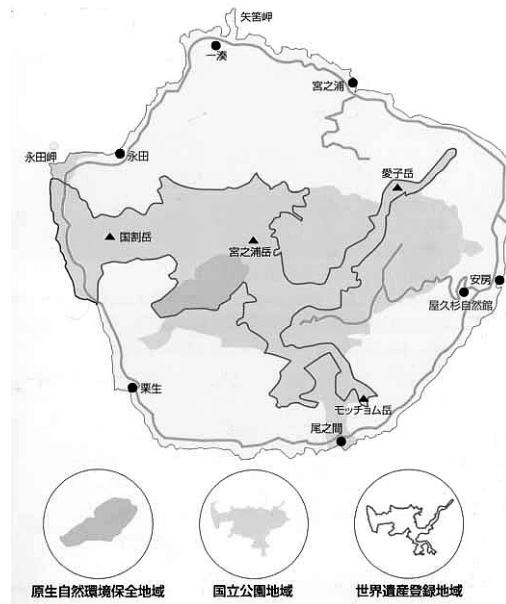
2.2 屋久島の自然と観光

2.2.1 世界自然遺産としての屋久島

(1) 屋久島の自然

1993年、白神山地とともに日本で最初の世界自然遺産に登録された屋久島は、面積的には日本の離島の中で十指に入る比較的大きな島である。ただ、全島面積の約9割が山岳地帯で、海岸沿いのわずかな平地に人が住んでいる。かつては、「人2万、サル2万、鹿2万」と言われ、今日もその絶対数はそれぞれ減じていても、人とサルと鹿がすみ分け、共存する森の島であることは変わらない(図2-1)。

図2-1 屋久島の自然保護地域



(出所) 屋久杉自然館 (2008) 11頁。

「洋上アルプス」とも表現されるように海上に屹立する独特の景観は、鹿児島から高速船で近づくにつれてその威容を現す。もっとも、船が着く宮之浦や安房の港近くから眺められるのは、前岳と呼ばれる海拔1000メートル前後の山々であって、2000メートルに迫る宮之浦岳などの奥岳の連峰は容易にその姿を望めない。

「月に35日雨が降る」と誇張される雨量は、時季によりまた山岳部と低地といった場所により異なり一様ではないが、海流と地形の影響もあって、総じて年間雨量は多く「水と緑の島」という形容にふさわしい。

こうした環境の中で、「山に10日、海に10日、里に10日」と言われるように、古くから人々は一カ月を三分して山と海と野で働き、それぞれの恵みを受けて農・林・水産業を営み、自然に感謝しながら、畏敬の念を持って自然とともに暮らしてきた。

ところが近代以降は、山林のほとんどが国有化され国の管理下に置かれることになった。特に戦後の高度成長期には木材需要の高まりを背景に林業開発が盛んとなり、林野庁の主導の下に山林の伐採と植林が急速に進められていった。

(2) 開発か環境保護か

江戸時代から伐採の続いた屋久島の森は、長年にわたって島に多大の経済的効果をもたらした反面、森の中の多数の切り株が示すように人の手がまったく入らないところはほとんどない。しかし高度成長期後の経済一辺倒を反省する時代を迎えて、自然環境保護の機運が屋久島にも波及する。

戦前から屋久島の杉を中心とした原生林の生物学的価値は注目されており、1922年には「学術参考保護林」地区が設定され、1924年には屋久杉が国の「天然記念物」、1954年には「特別天然記念物」に指定された。さらに1964年には、「霧島屋久国立公園」に指定されている。

しかしながら、本格的な保護の動きは高度成長期後の1970年代まで待たなければならなかった。世界的な地球環境保護の流れを背景に、森を人間中心の木材生産の場としてだけ見るのではなく、自然と人間との共生、持続的な自然環境の維持という観点から抜本的に見直す必要が出てきたのである。1966年の樹齢数千年と推定される縄文杉の発見は、屋久島の自然の価値を示すエポックメイキングなできごとであった。1971年の環境庁発足も、従来の林野行政の保全と開発のバランス政策に影響を与えることになる。

(3) 地元の動き

1970年代は、地元島民による自然保護活動が活発化した時期でもある。1972年にスタートした、柴鐵生氏ら若い世代を中心とする「屋久島を守る会」などの熱心な運動が、島内に「自然保護か開発か」の議論を巻き起こし、旧上屋久町町議会での原生林伐採禁止決議などにより、徐々にその輪を広げ、県・国の自然保護行政にも影響を与えという顕著な成果を生んだ。

合併前の旧屋久町では、町制30周年記念事業の一環として、自然を活かして地域振興を図る「屋久杉の里」事業が企画され、その象徴的存在として1989年に町立の屋久杉自然館を開設した。屋久杉と屋久島の自然を調査・研究するとともに、島民・観光客にもその成果をわかりやすく展示する施設となっている。花崗岩の島、屋久島の厳しい地質と独特の気候が、いかにして樹齢1000年を超える屋久杉を育んだかということが理解でき、改めて屋久杉原生林保護の意義を実感できる地元屋久島への思いのこもった施設となっている。

(4) 県の「環境文化村」構想

一方、鹿児島県は種子島と比較して発展の遅れている屋久島を、離島振興策の重要課題として検討していた。1990年に、県総合基本計画の戦略プロジェクトのひとつとして「屋久島環境文化村構想」が掲げられた。

この構想は当時の流行であったリゾート開発といった都会的視点からの開発ではなく、自然環境と人間の文化の調和をはかるという方向性を打ち出していたことに先見性があった。前述のような地元の動きや各界専門家の意見を取り入れた議論を重ね、1992年にマスタープランをまとめて公表した。翌年には事業推進のため、「屋久島環境文化財団」を発足させている。同財団は、県だけでなく屋久島の地元2町も出捐し、さらに志ある企業や個人の寄付も集め、①環境学習、②環境形成、③交流推進、④地域づくり支援の事業を進め、屋久島の環境文化創造のコーディネーター的役割を果たしている。

1996年には、屋久島の玄関宮之浦港の近くに、中核施設として「屋久島環境文化村センター」が開設され、展示・案内・ホール等の設備が整ったビジターセンター的機能を担っている。安房にある研修・交流施設「環境文化研修センター」とともに「屋久島環境文化財団」が運営を担当している。

(5) 世界自然遺産登録

世界自然遺産登録の着想は、1991年「屋久島環境文化村構想」推進の一翼を担っていた下河辺淳氏を座長とする懇談会の議論の中から生まれたと言われている。関係各界への働きかけも功を奏し、屋久島の特異な自然生態系が世界的評価を受けることになり、1993年に白神山地とともに日本初の世界自然遺産に登録された。

屋久島の自然は、特に海岸付近の亜熱帯植物から山岳部の亜高山帯にいたる植生の垂直分布が顕著に見られる点、樹齢数千年に及ぶ屋久杉の天然巨樹林が存在する点が貴重なものとされている。

屋久島の森は、決して手つかずの自然ではなく、古くから人の介入を受け続けながらも生態系を維持してきた。特に屋久島西部の瀬切川右岸地域や西部林道周辺地域の自然が、地元の熱意ある人々の力で辛うじて保全されたことは、そのすばらしい景観を前にして本当に意義深いものと感銘を覚えた。ユネスコ世界遺産センターのドロステ所長（登録時）は、「自然遺産としての屋久島の価値は、多くの人たちが暮らして

いながら、すぐれた自然が残されていることにある」と述べている。

屋久島の世界遺産登録は、屋久島が人の営みと自然の営みをかろうじて調和させてきた「命の島」であることを高く評価したものと言えるだろう。

2.2.2 世界遺産の島と観光

(1) 観光客の増加

屋久島の場合、世界遺産登録が観光客の急激な増加を招いたわけではない。それ以前から、屋久島の自然の魅力は広く知られており、年間総入込客数を見ても1970年代後半以降はコンスタントに10万人を超えて推移してきた。従来、船で3時間半～5時間程度を要した鹿児島との間を、1時間半～2時間以内で結ぶ高速船「トッピー」が就航した1990年代になると、20万人台に増えている（表2-2）。離島という地理的条件から、交通アクセスの寄与が大きいことがうかがえる。

表2-2 屋久島の観光客数の推移

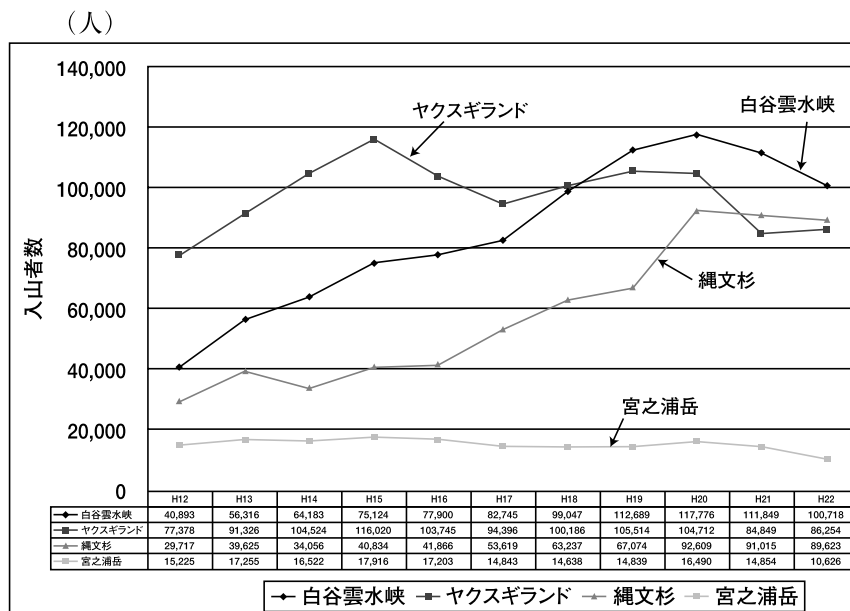
区分 年度	入込客数(人)			対前年比
	船	航空機	計	
1988	69,021	53,128	122,149	105.5%
1989	121,559	49,925	171,484	140.4%
1990	140,763	46,706	187,469	109.3%
1991	172,404	49,361	221,765	118.3%
1992	186,721	54,902	241,623	109.0%
1993	153,028	56,191	209,219	86.6%
1994	175,007	58,482	233,489	111.6%
1995	203,231	53,414	256,645	109.9%
1996	195,880	56,958	252,838	98.5%
1997	202,721	61,013	263,734	104.3%
1998	211,288	68,447	279,735	106.1%
1999	193,927	66,234	260,161	93.0%
2000	191,570	71,507	263,077	101.1%
2001	209,697	76,580	286,277	108.8%
2002	204,531	85,004	289,535	101.1%
2003	228,436	86,330	314,766	108.7%
2004	203,271	90,561	293,832	93.3%
2005	231,332	85,552	316,884	107.8%
2006	251,239	81,985	333,224	105.2%
2007	332,028	74,359	406,387	122.0%
2008	310,531	75,456	385,987	95.0%
2009	251,931	75,930	327,861	84.9%

(出所) 種子屋久観光連絡協議会の資料より筆者作成。

世界遺産登録後も来島者は着実に増加し、登録10年後の2003年には30万人を突破

し、その後も年により若干の変動はあるが30万人台をキープしている。ヤクスギランドや白谷雲水峡といった島内の主要観光スポットの入場者数から判断すると、近年は入込客数のうち観光客が占める割合が従来の約5割から約6～7割程度に増加しているものと推定され、世界遺産登録の効果が誘因となっているものと考えられる（図2-2）。

図2-2 目的地別入山者数の推移



(出所) 屋久島町エコツーリズム推進協議会(2010)9頁。

(2) 観光の効果

世界遺産登録後の観光客の着実な増加は、地元屋久島にプラス・マイナス両面で大きな影響を与えている。まずプラス面では、第1次・2次産業が生産額・就業人口ともに他の農山漁村地域同様、減少傾向にありながら、第3次とくに観光関連を中心としたサービス産業がこれをカバーして、総生産額・一人当たり所得の水準をキープしている点である。経済効果ばかりでなく人口の面でも、離島でありながら社会増により人口は微増に転じて過疎化を免れている。

観光客も、国内外からわざわざやってくる人が多く、自然志向の目的を持った滞在型

やリピーターの宿泊客が多いのも特徴で、屋久島を舞台に時代を先駆ける新しいエコツーリズム・新しい地域間交流も生まれている。

行政の面でも、それまで開発と自然保護について微妙に温度差のあった旧上屋久・屋久の2町が、世界遺産登録をきっかけとして屋久島全体を考えた自然保護とその利用について歩調を合わせ、1993年には共同で「屋久島憲章」を制定するに至った。

こうしたことが伏線ともなって、2007年に両町が合併して、屋久島町が誕生した。全島を一元的にまとめることは地域の発展にとって望ましいことだろう。ただ、役場本庁は旧二町のほぼ中間地の空港近くに置かれているが、主要機能は旧町の役場の拠点にバランスを配慮しながら残されており、全島一丸となった行政の真価が問われるのはこれからだろう。

(3) 観光化の影

幸か不幸か離島という地理的条件に加えてジェット機が着く空港もなく、屋久島は世界遺産登録後も一過性の団体ツアーや日帰りの立ち寄り観光客などが安易にどっと押し寄せるといったことはない。

しかしながら、近年は年間20万人を超える観光客の多くは白谷雲水峡・ヤクスギランド・縄文杉を目的として山や森に入る。特に夏季シーズンには集中し、町の資料によれば縄文杉登山者数は、2002年には1日当たり300人を超える日が年間10日ほどしかなかったが、2008年には1日当たり300人を超える日が年間135日に達し、さらに最近では1日あたり1000人を超えることも少なくないそうである。確かに、筆者らが登った2010年9月の平日でも、縄文杉への登山路には行列ができていたほどである。

徐々にはとはいえ年々増加する観光客により、屋久島の貴重な自然に対する負荷が顕著となってきた。動植物等への接し方、ごみ・トイレといった登山マナー、住民の暮らしへの配慮等エコツーリズムの根底を揺さぶる問題も生じている。

これに対し屋久島では、「屋久島憲章」に象徴されるように、住民・町・県・国がベクトルを合わせてエコツーリズムを推進してきた。2004年には、官民の関係諸団体の連携によりエコツーリズム推進協議会が発足し、エコツーリズム推進のための「屋久島ルール」の設定やツアーガイドの養成を始めとして全島挙げて自然環境の保護と地域の振興を両立するための先駆的な諸活動を展開している。

2.2.3 観光と地域 屋久島のこれから

かつて屋久島の豊かな森の資源を活用した林業が屋久島の産業と生活を支えた。やがて、そこから開発と環境保護の葛藤が生まれ、長い年月の試練を経て屋久島の自然の稀有な価値を発見し、世界自然遺産の登録を受けるまでに至った。さらに2012年には、単独で屋久島国立公園となった。

今、屋久島では一面において、観光がかつての林業の役割を果たしつつあるのかもしれない。観光は島に豊かさをもたらす光の面とともに、屋久島の森にさまざまな弊害を生ずる影の面も持っている。屋久島町では、近年の観光化の弊害に対し、入山者数の制限や環境保全のための入島料の導入などの対策が検討され、一方で観光産業への悪影響を懸念する側との賛否両論の議論が起こっている。

しかしながらこれからの地域づくりにとって、観光を経済的側面だけでとらえるべきではないだろう。もちろん観光は地域の貴重な資源を活用する産業となり、地域を活性化する効果をもつが、重要なことは地域の貴重な資源を守りながらその恩恵を受けるということである。屋久島の場合、その資源は世界に誇るべき貴重な自然にほかならない。

かつて林業開発に直面することによって、島の内外の人々が屋久島の森の価値を発見し、真剣に人と自然との共生の道を探ったように、あたらしい観光が屋久島のさらなる自然の魅力の保全と人間生活の向上との折り合いの道を発見することにつながるかもしれない。

大切なことは、まず地域の人自身が屋久島の自然の真の価値を深く知り、地域を超えたあるいは世代を超えた人々とその価値を共有することである。エコツーリズムとは、それを可能にするものでなければならない。地域の環境と文化は、樹齢1000年を超える屋久杉のように、過酷な風雪に耐えながらゆっくりと時間をかけて着実に育っていくものである。

3. 「観光」という概念の再検討 屋久島における自然と人間⁷⁾ (長妻三佐雄)

本章の課題は、屋久島の原生林を保護する運動を推進してきた柴鐵生氏の活動に注目するとともに、その哲学に迫り、日本思想史の文脈で考察することである。筆者らは、2010年夏に屋久島で調査と資料収集を行い、柴氏が営む「屋久の子の家」に宿泊した。

そこで、柴氏にインタビューした内容と柴氏の著書である『あの十年を語る 屋久杉原生林の保護をめぐる』を手がかりに、そもそも「観光」とは何であろうか、という根本的な概念について考察する。

はじめに、柴氏にインタビューするなかで、とくに印象に残ったことを記しておきたい。まず、世界遺産に指定されたことに関して、世界遺産指定は自然のほうから見れば必ずしもいいことばかりではない。世界人類の遺産を本当に守るつもりならば、さらに遺産登録地域の保全に関する特別な法が必要なのではないか。また、縄文杉が脚光を浴び、日本百名山の一つとして宮之浦岳を多くの登山者が訪れる。だが、元来、山は聖域であり、観光の対象ではなかった。永田に住む人にとって特別な山は永田岳であり、各地域の人びとがその里固有の山を信仰し、大切にしていた。屋久島の人、山に行く習慣はなく、御嶽は神がいる場所であった。山と村の境界である里山も面妖が出る場所である。

柴氏は、観光客が縄文杉に集中している状況に苦言を呈する。縄文杉が屋久島の代名詞のように語られるときがあるが、屋久島はそのようなものではない。縄文杉が観光の対象となり、人びとが宮之浦岳を登頂することに対する違和感を柴氏は抱いているように思えた。現在よりも観光客の数が減ってもいい。訪れる人の数ではなく、心ある人に屋久島を知ってほしいというのが柴氏の願いではなかろうか。

では、屋久島の世界を知るとはどういうことであろうか。柴氏によると、屋久島は縄文の島であり、共生と循環の島である。弥生は農業が中心であり、自然をコントロールしようとする。人間が自然を制御することが農業の本質であると柴氏は見ていた。だが、屋久島は自然との共生を余儀なくされた島であり、自然のなかに人間が存在している。自然をコントロールするのではなく、自然の摂理のなかで人間が暮らしているのである。柴氏は、幼いころには、種子島に対する憧れがあったが、出身を聞かれると鹿児島だといっていた時期もあるという。だが、今では自然と共に暮らしている屋久島を大切に思い、出身を尋ねられても躊躇することなく屋久島だという。

柴氏の話で印象に残ったのは、嶽詣の復活についてである。柴氏は自然を保護するという発想そのものに反対する。保護するという発想そのものが人間の傲慢であり、自然に対して人間が優位に立ち、自然をコントロール可能だと考えるところからくるのではないか。それ故に、柴氏は、保護の対象である海亀とも対等であって、相互に恵んで助け合い、感謝する関係にあると主張する。かつて、屋久島では、海の神である海亀が卵

を残してくれ、人間に恵みを与えてくれるという思いがあった。したがって、海亀は食べないが卵は食べる習慣があった。もちろん、保護するという発想からは海亀の卵を食べるということは許されない。また、現在では、世論も許さないだろう。柴氏は、昔の人々は海亀から卵を恵んでもらっていたが、異界からきた海亀に感謝する気持ちを有していたと指摘する。卵も食べずに、人間が海亀を保護するという関係性の中に、逆に人間の自然に対する支配を見て取る。むしろ、昔の人々は、卵を食べたが、海亀を対等な存在として尊重し、人間も海亀も大いなる自然の中でともに暮らす存在であった。そこには、海亀を支配するという発想はない。柴氏は一方的に海亀を保護することを批判するが、それは保護と支配に通底する人間の自然に対する傲慢さに目を向けていたからであろう。

山に対する思いも、海亀との関係と同じである。柴氏が嶽詣を復活させようとしたのも、自然と人間との原初的な関係を想起してのことである。人間が主人公になり、観光目的で山に行くのではない。人間中心の考え方に依拠する自然保護も、かえって自然を損ねる場合がある。柴氏は自然保護という表現が一つの方便であるという。道路は必要最小限でよいという考え方から、柴氏は、西部林道に大型バスを通るようにして、二車線にするという案に反対した。人間の都合を優先するのではなく、森が主人公という考え方から車を優先する発想そのものに反対したのである。

さて、嶽詣についてである。柴氏は嶽詣と永田岳登山について次のように語っている。

「夏休みに青年が主催する嶽詣に中学生が参加する登山は、永田岳の権現様に塩や酒などをお供えするなどの形式は留めていましたが、その実、伝統的嶽詣から登山への変容の過程にあるものでした⁸⁾。」

永田岳登山と嶽詣とを柴氏は慎重に区別する。嶽詣を復活しようとしたが、それは単に永田岳登山を行うことではなかった。注目すべきは、第一に「嶽詣の作法を昔ながらの形で行うこと」、第二に「永田岳までの道標を永田の昔からの呼称に戻すこと」を実行したことである。自然に対する畏敬と感謝の念を失いつつある現在、世界遺産に登録されていくなかで「自然は痛み、その価値を損ない続けています」と柴氏はいう⁹⁾。自然と人間との共生を訴えている私たちが「善意そのものの装いでなおも自然を喰いものにしていく」。柴氏は「島民の側の自然に対する哲学」と「島民の意識や魂」が必要であると主張する¹⁰⁾。いくら人間と自然との共生を訴えても、その根底に自然に対する哲

学がなければ、善意によって自然を損なう危険性がある。自然と人間との関係を根底から問い直す必要がある。嶽詣を復活した背景には、古代から連綿と続く島民の自然に対する「魂」や「意識」を想起し、継承しようとする思いがあった。観光についても、柴氏は「訪れる側、送る側、受け入れる側」の「三者が一体となって成り立つ世界」であると語る¹¹⁾。とくに、屋久島の自然を保全し、「持続的観光」を可能にするためには「受け入れる側の論理を基本にすべき」であった。屋久島の森が主人公であり、人びとを迎え入れる屋久島の自然の論理こそが重要なのであった。一見すると、着地型観光という名称は、「受け入れる側の論理」を基本にしているようである。だが、発地型に対して着地型というだけでは、単に担い手が異なるだけである。地元民の方が観光の穴場をよく知っており、魅力あるコース設定を行うことも可能であろう。それに、地域特有の歴史や文化や言い伝えなど、着地型観光にしかできない情報発信もあるだろう。しかし、それだけでは、柴氏のいう「受け入れる側の論理」に迫ることはできないのではないか。それは発地か着地かという区別ではなく、その地域固有の自然に対して抱いている哲学を理解することであり、その地域固有の自然に対する意識を謙虚に学ぶことであろう。

この「島民の側の自然に対する哲学」に依拠しながら、柴氏は屋久杉原生林を保護しようと立ち上がる。民宿「屋久の子の家」に込められたメッセージを著書『あの十年を語る』から読み取ることができる¹²⁾。屋久島を離れ、東京で暮らしていた若き日の柴氏らが屋久島に寄せた熱い想い。原生林保護の拠点として設立した「屋久の子の家」。それは民宿であるとともに「屋久の子会」を継承するものであり、新たな出会いの場でもあった。

柴氏の屋久杉原生林の保護運動から、私は民主的な意思決定と保護運動との問題について考えさせられた。

たとえば民主主義の問題を考えると、国民一人ひとりが独立した精神を有し、主体的に判断することが求められる。ルールを作るときにも、国民が自分で考え、自発的に行動することが重要になってくる。多くの人びとが流行現象に右往左往したり、大勢に飲み込まれ、自分で判断できなくなると、民主主義は危機に瀕する。林達夫が「大衆に対して事態の実相を示し、冷静的判断によって態度決定と行動化に自主的に赴かせる点¹³⁾」に民主主義の真髓があると語ったように、人びとが、流言飛語に惑わされ、感情的なスローガンによって冷静な判断ができなくなることは、デモクラシーの実現が困難である

ことを物語っていた。

民主的な意思決定にとって、「作る」という場合、自らの主観のなかにあるイメージを具現化することが重要になる。すなわち、一人ひとりが自分自身で判断し、あるべき秩序像を模索する。もちろん、一人ひとりが自分の内部に沈潜することで、ある判断に到達することもあるだろう。また、対話のなかで、自分の考えを練り上げ、独自の判断を形成することもあるだろう。だが、人間が対象をコントロール可能な状態に置き、主体的に働きかけるという点では共通している。ルールや秩序は人間が作りだすものであり、制御可能なものであった。

だが、主体性の問題とともに、「作ること」それ自体に焦点をあて、考察するとき、「作ること」の豊かな可能性が浮かび上がる。三木清が指摘したように、たとえば、慣習は人間が作ったものでありながら、人間の制御を超えたものである。合理的であるとともに非合理的な要素に支えられている¹⁴⁾。現実には生きている人間は具体的な状況のなかで生活しており、その視野も限定されている。当然のことながら、不完全な存在であり、それはいくら多数の人間が集まっても、完全な真理に到達することは不可能である。

たとえば、柴氏が「瀬切の森」を守るために、町議会の意見をまとめようとしたときも、現在生きている人間の短期的な利益が桎梏となる。多数決を採用しても、短期的な利益を優先してしまい、長期的にみて取り返しのつかないダメージを自然に与えることもある。このすばらしい森を「次世代」に渡すために、柴氏は数多くの政治家に直接訴えかけ、さらに林野庁の人びとと真剣に議論する。すぐに多数決で決着を付けることなく、徹底的に議論し、その議論を通して「やりあった相手」に「共感」を抱くようになる。とりわけ、林野庁の塚本隆久氏との激しい議論のあと、塚本氏が自ら「瀬切の森」に入り、その森を残そうと尽力したことは印象的である。柴氏に反対していた塚本氏であったが、自ら森の中に入ることで、考え方を変える。塚本氏の「信念」に突き動かされ、林野庁の人びとの心も動いてゆく¹⁵⁾。この保護と開発の葛藤のなかで、「森」を残す選択をしたことは、民主主義について考えるときに意義深いものである。すなわち、現在生きている人びとの利益だけではなく、そこに「次世代」の利益も組み込んでいるからである。保護と開発の狭間で、議論を積み重ねながらルールを作り出すのは、現在生きている人間であるが、主人公は屋久島の自然であり、森であり、生き物であり、そこに暮らす過去・現在・未来の人びとである。現在生きている人間は、謙虚に多くの存

在に耳を傾け、議論の中に声なき声をくみとり、反映させる必要がある。現在生きている人間の利益をこえた物事の決め方が屋久島原生林の保護の中に見いだすことができるのではないだろうか。それは持続可能な自然と人間の共生の姿を模索するうえで、民主的な意思決定が果たす役割について考察することにもなるだろう。

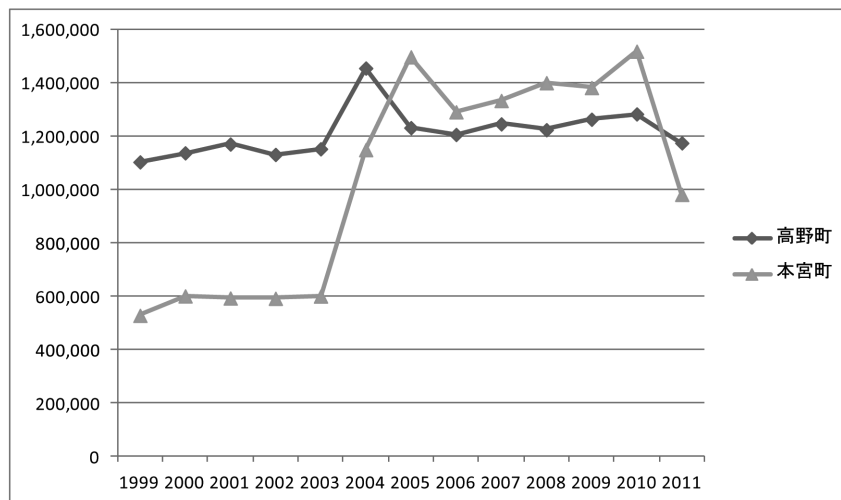
4. 着地型観光の光と影 紀伊山地の霊場と参詣道¹⁶⁾ (横見宗樹)

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、2004年7月に登録された、わが国で12番目となる世界文化遺産である。紀伊山地は、古来より山岳修行の舞台として日本の宗教や文化の発展に大きな貢献を果たしてきた。世界遺産としての登録資産は、熊野本宮大社や熊野那智大社を中心とする「熊野三山」、金剛峯寺を中心とする「高野山」、吉野山を中心とする「吉野・大峯」の3地域にわたる山岳霊場と、そこに通じる「参詣道」(熊野参詣道、高野山町石道、大峯奥駈道)より構成されている。これらの地域は、和歌山県、奈良県、三重県の3県にまたがり、総登録資産数は24箇所に及んでいる。

本章では、この地域で展開されている着地型観光の取り組みを観察することで、世界遺産の登録による効果と課題について検討する。

図4-1は、和歌山県の世界遺産登録市町村のなかから高野町と本宮町(現在は田辺市の一部)を抜粋して観光入込客数の推移をみたものである。世界遺産に登録された2004年の前後における変化をみると、高野町は2003年から2004年にかけて約115万4000人から約145万7000人と約26%増加したものの2005年には約123万4000人へと減少し、その後は横ばい傾向が続いている。一方で、本宮町は2003年までは約60万人前後で推移していたものの、2004年から2005年にかけて約2.5倍となる約150万人に急増しており、その後も高野町を上回る水準で推移を続けている。なぜ、この2つの地域で世界遺産の登録による観光入込客数の変化に対照的な違いがみられたのであろうか。

図4-1 和歌山県の世界遺産登録市町村における観光入込客数の推移



(出所) 和歌山県商工観光労働部観光局観光振興課の資料を中心に筆者作成。

4.1 高野町 宗教都市としての伝統と観光の調和

高野町における観光は高野山を中心に成立している。高野山真言宗の総本山である金剛峯寺を擁する高野山は、弘法大師空海を開祖とする真言密教の修行道場として全国にその名を知られている。高野山へは鉄道アクセスが整備されており、大阪市内(南海難波)から特急電車とケーブルカーを利用すれば1時間40分程度で到着できることから、観光客の訪問も多い。

観光の側面からみた高野山の特徴は、主要な観光関連組織に寺院が関与していることである。たとえば、1996年に発足した「高野町観光事業推進委員会」は、高野山におけるツーリズムビューロー(観光振興組織)の機能を果たす「観光情報センター」を運営しているが、その委員会構成は、高野町、高野山宿坊組合・観光協会、高野町商工会のほか、金剛峯寺が参画している。また、そのなかの「高野山宿坊組合・観光協会(これでひとつの組織名称である)」は、いわゆる観光協会の機能を有する組織であるが、実質的な運営は宿坊組合がおこなっている。

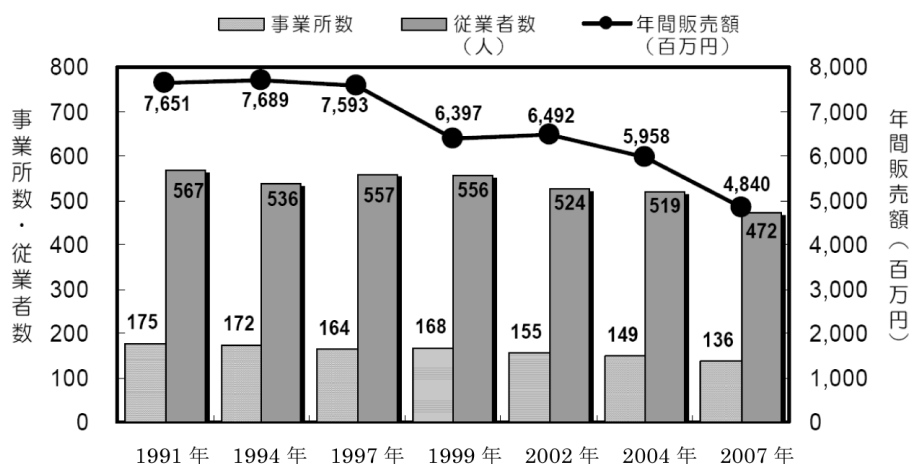
着地型観光の動きは高野山でもみられ、高野山宿坊組合・観光協会は、第3種旅行業者の資格を取得して着地型のツアー(募集型企画旅行)の催行に対応できる環境を整え

ている。しかしながら、着地型観光の取り組みは、宿坊に宿泊して精進料理を味わうものや、阿字観と呼ばれる瞑想の体験など、従来型の仏教体験を主とするものが中心となっている¹⁷⁾。近年では、森林セラピーと呼ばれる森林体験プログラムなど新たな取り組みも実施されているとはいえ、宗教都市としての伝統を乱さない調和のとれた観光が志向されている。

こうしたなか、高野町の経済は世界遺産登録の恩恵を十分に受けているとは言い難い状況である。その象徴的な事例は、高野山大学を中心とした学生街の衰退である。1886年に開学した高野山大学は文学部密教学科という特徴的な教育課程をもつ4年制の単科大学である。少子化の影響もあり、2005年の学生数は331名であったものが2012年には155名と約半数まで減少している¹⁸⁾。その影響から、寄宿舎や食堂をはじめとする学生向けの施設が徐々に姿を消してゆき、地域経済の疲弊が懸念されている。

図4-2は、高野町の商業における事業所数、従業者数、年間販売額の推移を示したものである。これによれば、1991年から2007年の間に、事業所数、従業者数、年間販売額の全てが、ほぼ一貫して減少を続けており、世界遺産に登録された2004年の前後においても、この傾向に何ら変化がみられないことが特筆される。

図4-2 高野町の商業における事業所数、従業者数、年間販売額の推移



(出所) 和歌山県高野町(2009)125頁。

このように、高野町では寺院が主要な観光関連組織に参与しているために伝統的な仏教体験の枠を超えた着地型観光は目立った進展がみられない。しかし、そのために宗教

都市の伝統と風格を壊さない静謐な環境が維持される一方で、世界遺産の登録による十分な経済効果の恩恵を受けていないというのが、この地域の特徴である。

4.2 本宮町 世界遺産ブームと環境保全

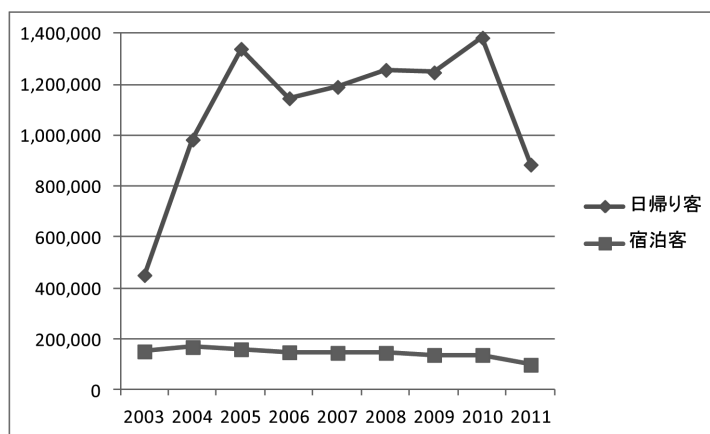
本宮町（田辺市）は、熊野詣として平安時代より全国的な信仰の対象であった熊野本宮大社や、紀伊半島を代表する温泉地である熊野本宮温泉郷（湯の峰温泉、川湯温泉、渡瀬温泉）など、屈指の文化・観光資源を有する地域である。なかでも、熊野参詣道のひとつで熊野御幸の御幸道でもある「中辺路」は、古来より多くの参詣者で賑わったとされており、現在でも王子社（熊野三山の御子神）や石畳の古道など、往時の面影が色濃く残されている。このことから、2004年の世界遺産の登録以後は、健康志向のウォーキングブームの波にも乗って各地の旅行会社より「熊野古道ウォーク」といった観光ツアーが競うように発売されて、爆発的な観光客の増加がもたらされた。

しかしながら、この地域は公共交通機関のアクセスが十分に発達しておらず、たとえば熊野本宮大社であれば、路線バスを利用してJR 紀伊田辺駅から約2時間、JR 新宮駅から約1時間のアクセスとなる。したがって、この地を訪れる観光客にとっては、マイカーもしくは貸切観光バスが最も利便性の高いアクセス手段となる。

こうした背景もあり、さらにはホテルや旅館等の宿泊施設の絶対数が少ないこともあり、本宮町は世界遺産の登録以降において観光入込客数が爆発的に増えたものの、その圧倒的多数は宿泊を伴わない訪問客となっている。図4-3は、本宮町の観光入込客数の推移を日帰り客と宿泊客の別にみたものである。これによると、宿泊客数は世界遺産の登録年である2004年と2005年に若干増加したものの、その後はほぼ一貫して減少が続いている¹⁹⁾。本宮町は、その地理的特性より京阪神地域からの日帰り旅行は困難であることから、宿泊を伴わない入込客（図4-3でいう「日帰り客」）の多くは白浜や伊勢などの他地域に宿泊していることが推測される。したがって、本宮町の観光における課題は、観光客にとって単なる通過地点ではなく、宿泊をともなう滞在をしたくなるような魅力を創造することといえるであろう。

着地型観光と地域社会

図4-3 本宮町の観光入込客数（日帰り客と宿泊客）の推移



（出所）和歌山県商工観光労働部観光局観光振興課の資料より筆者作成。

そのための取り組みを強力に推し進めているのが「田辺市熊野ツーリズムビューロー（以下、田辺市 TB と略する）」である。2005年に、本宮町は、田辺市（旧）、龍神村、中辺路町、大塔村と共に合併し、新・田辺市としてスタートした。それにともない、2006年、田辺市の総合的な観光プロモーション実施団体として、熊野本宮、龍神、中辺路、大塔、田辺の 5 つの観光協会の連携により田辺市 TB が官民共同で設立された（なお、この 5 つの観光協会は今なお存在し、それぞれ地域の観光振興に向けて活動を続けている）。

田辺市 TB は、世界遺産という地域の強みを活かした特色ある着地型観光を推進しており、2010年に第 2 種旅行業者の資格を取得するとともに、インターネットによる旅行予約システムも提供している。昨今では、とりわけ本宮や龍神に宿泊する女性限定の 1 泊 2 日のツアー（主に健康や美容をテーマとするヘルスツーリズム）を積極的に企画している。こうした着地型の旅行商品の販売にあたり、宿泊施設 70 軒、語り部・体験など 15 件、交通機関 8 社、飲食店 5 軒、合計 98 施設と契約を結んでおり、その売上高は約 2400 万円（うち約 400 万円はインターネット予約によるもの）である。こうした旅行商品の企画・販売にともなう発信力は、テレビや新聞、雑誌などの各種媒体に対する露出を広告費換算したとして約 10 億 1000 万円と試算されている²⁰⁾。

このような着地型観光が盛んになる一方で、観光客の急増にともなう課題も指摘されている。その一例が古道の環境破壊である。たとえば、本宮町の事例ではないが、熊野

古道のなかでも非常に保存状態の良いとされている那智山の「大門坂」(那智勝浦町)では、急増した観光客により石段に自生していた苔の剥落が全面にわたって進んでいるという状況が報告されている²¹⁾。貴重な世界遺産を保全する観点より、環境保全とバランスのとれた観光振興の取り組みが不可欠である²²⁾。

4.3 世界遺産の登録による効果と課題

一般的にいわれるように、観光振興の成否は、その地域のツーリズムビューローの意欲や力量に大きく左右される。

本章で取り上げた高野町は、世界遺産の登録に関わらず着地型観光のスタイルを大きく変更することはなかった。寺院が影響力を保持する形で野放図な観光振興に歯止めがかけられ、伝統的な寺社観光地の環境が守られた。しかし、その一方で、高野山のツーリズムビューローである観光情報センターは、新しい形の着地型観光に踏み出すことが容易でなく、世界遺産の登録が相応の経済効果を与えたとは言い難い現状である。

これに対して、本宮町は、行政が大きく関与するかたちで田辺市TBが設立され、「官民協働」をキーワードに全く自由な発想に基づく数々の新たな着地型の旅行商品を企画・販売し、地域の観光振興に堅固な存在感を定着させることに成功した²³⁾。しかし、その一方で、観光客の急増にともなう環境面での課題が懸念される現状にある。

このように、同じ世界遺産の登録地域で対照的な2つの事例が観察されたことは、観光と環境をバランスよく調和させることが、いかに困難であるかを物語っていると同時に、これを調和させるためには、ツーリズムビューローに期待される役割が非常に大きいことを示唆するものである。

あとがき

着地型観光のあり方について世界遺産の事例を中心に検討することが、このプロジェクトの課題であった。これは、地域文化論、地理学、日本思想史、観光学、という専門の異なるメンバーによる共同研究であり、学際的に地域社会と観光について考察した。

飯田は「世界遺産としての石見銀山」で、先行研究に依拠しながら、戦国時代から現代にいたるまでの石見銀山の歴史的な意義について概観し、また、世界遺産登録と文化

的景観の保全について検討した。伊木は「地域の宝を守るもの」という視点から、「住民が守る文化的景観」では、民の活動に焦点をあて石見銀山の保全と町づくりについて紹介した。その結果、民間におけるキーパーソンの存在が大きいことを改めて確認した。つづく「屋久島の自然と観光」では、地域文化論の観点から屋久島の自然について紹介したあと、世界遺産登録が及ぼした影響を客観的に検討した。観光の効果を経済的な側面に限定せず、住民・町・県・国による地域社会へのかかわり方に与えた影響についても分析している。さまざまな団体や人びとが多種多様な関心から世界遺産登録にかかわり、協力し合う側面と温度差を感じる側面があることを検証した。長妻は「観光という概念の再検討」を課題として、屋久杉の原生林を守ってきた柴氏との対話のなかで学んだことを文章にした。『あの十年を語る 屋久杉原生林の保護をめぐる』という柴氏の著書を手がかりに、発地・着地の区別にこだわらず、観光の在り方そのものを考察した。さいごに、横見は「着地型観光の光と影」で、「紀伊山地の霊場と参詣道」における高野山地域と熊野本宮地域を比較検討した。世界遺産登録後の入込観光客数の推移などの統計をもとに、両地域が世界遺産登録によってどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか、検討を加えた。横見の見るところ、民間におけるキーパーソンが重要な役割を果たした屋久島や石見銀山とは異なり、田辺市では行政が旗振り役となった点が特徴的である。

このように、専門分野を異にするメンバーが集い、着地型観光について検討することで、従来の観光学ではとらえきれなかった問題が浮き彫りになったのではなかろうか。四人で現地調査を行い、数多くの人びとから話を聞くなかで、「着地型」とは何か、さらには「観光」とは何かという基本的な問題を考えざるをえなくなった。

たとえば、観光と地域経済という視点から考えるならば、現在生きている人間を基点にした地域の活性化が目標になる。持続可能な観光事業を目指したとしても、どうしても同時代人の時間感覚に縛られることになる。そこに歴史学や文化論、地理学の視点を持ち込むことで、より長期的な視点から持続可能性について考察することができる。必ずしも同時代人の時間感覚に縛られることなく、各地域で育まれてきた歴史や文化のなかに私たち自身が身をおく。さらに、人間の歴史を遥かに超えた自然のなかで生かされていることに感謝し、言葉にはならない自然の声を地理や植生を学ぶことによってくみあげてゆく。現在生きている私たちの視点を相対化し、より大きな存在のなかで、人間と自然のあり方をとらえ直すことこそが、民主的な意思決定を行う場合にも必要ではな

いだろうか。その意味でも、屋久島の自然に畏敬の念を抱き続けた柴氏や、古地図に魅せられて石見銀山の世界的な価値に揺るぎない確信を失わなかった中村氏、古いものの価値を大切にしながらも、それを活かしながら新しいものを創作しようと模索した松場氏の哲学こそが、地域問題を考えるときに重要ではないだろうか²⁴⁾。これは桑子敏雄の言葉を借りるならば、「空間の履歴」に基づきながら、民主的な決定を行うことに他ならない²⁵⁾。

このように考えるならば、着地型観光という概念も、ただ単に発地型に対して観光客を招き入れる現地の人びとが主体となって観光プランを組み立てるということだけでいいのだろうか。すなわち、発地型では気がつかない着地型ならではの観光スポットや穴場の情報や視点を提示できる、これらが着地型の強みであることは容易に理解できる。だが、それだけではない。観光スポットやコースといった表面的なものではなく、着地型観光にとっては、有機的な意味連関を有する「空間」そのものを体験することが何よりも重要ではないだろうか。そこに暮らす人びとの抱く自然に対する畏敬の念や感謝の想いも含めた価値意識にふれること、それが発地型と着地型を本質的に区別するものになりうるであろう。観光も、均質な空間を移動するのではなく、異質的な「空間」にふれあい、自らの視点を相対化し、問い直す機会としてとらえることができる。異質的な価値意識を有する空間にふれあうこと、それは驚きであり、場合によっては不便で不快なこともあるかもしれない。異質的な要素を排除し、不快なものを視界から遠ざけるならば、どれだけ旅を繰り返そうと自己の価値意識は変化せず、観光から学ぶことは少ない²⁶⁾。想像力たくましく、異なる価値意識をそれ自体として尊重するとき、同じように見える空間でも、驚きと発見の連続で、自らの価値意識を問い直す契機になるのではないだろうか。過度に快適さや効率を求め、他者に対する想像力を欠くとき、人は異質的なものに接しても驚くことはないだろう。だが、異なる価値意識の存在から目を背けると、観光の貧困という事態が招来するのではないか。それは何も観光に限ったことではない。たとえば、日常生活における「体験」についても同じことがいえるだろう。さまざまな体験を繰り返し、表面的には成長しているように見えても、どれだけ異質的な要素と邂逅することで思索し、自らを深化させているか甚だ心もとない。かつて森有正が「体験」と「経験」を慎重に弁別したように、私たち自身の生が問われている。世界遺産登録は、その地域の住民をまきこみ、それまで観光に関心のなかった人びとに地域社会のことを考える契機であった。一般的な観光地では、「着地型」といって

着地型観光と地域社会

も、観光業者や地域活性化に高い関心を持つ人びとの問題であった。だが、世界遺産に登録されることによって、また、登録化の過程の中で、多様な人びとが観光の問題に関心を持ち、地域の問題に対する関心を高めるようになる。観光業以外の人びとの声を多く拾えたことも今回の調査の収穫であった。この方向性は今後も深めていきたいと考えている。この共同研究では、学際的に地域社会と観光の問題を考察することで、多様な角度から着地型観光という概念そのものを問い直すことを最終的な目標とした。観光客と地域社会の両者にとって、着地型観光が新たな旅の在り方を提供してくれることを願ってやまない。

謝辞

本研究は、大阪商業大学アミューズメント産業研究所「平成22・23年度研究プロジェクト（研究課題名：着地型観光が地域に及ぼす影響に関する研究：世界遺産登録地を事例として）」による助成を受けたものである。屋久島、石見銀山、高野山、田辺市の現地調査に際しては、行政や観光組織のほか地域住民の皆様より数々の有益な情報や示唆をいただいた。ここに記して、厚く感謝の意を申し上げる。

〔注〕

- 1) 石見銀山資料館編(1999)、7頁。
- 2) 石見銀山展実行委員会編(2007)、17頁。
- 3) 島根県立大学総合政策学部井上厚史研究会ゼミ学生(2011)、13頁。
- 4) 島根県教育庁文化財課世界遺産室編(2008)、4頁。
- 5) 金田(2012)、2頁。
- 6) 原(2011)、23頁。
- 7) 2010年8月に屋久島でヒアリングを行い、民宿「屋久の子の家」にお世話になり、柴氏からお話をうかがう機会を得た。どのような質問に対しても真摯にお答えくださり、観光という観念について根本から考える機会を提供してくださった。深く感謝申し上げる。
- 8) 柴(2007)。
- 9) 柴(前掲書)、14～19頁。
- 10) 同、18頁。
- 11) 同、40頁。
- 12) 同、62～65頁。
- 13) 林(1971)、279～280頁。
- 14) 長妻(2010)を参照。
- 15) 柴(前掲書)。
- 16) 本章の執筆にあたり、高野町観光情報センターの亀岡靖典氏、田辺市熊野ツーリズムビューローの竹本昌人氏、登美屋(龍神村)の松場英氏には、ヒアリング調査ならびに資料の提供においてご協力

- をいただいた。厚く御礼を申し上げます。
- 17) 和歌山県高野町(2009)は、これを「信仰ツーリズム」と表現している。
 - 18) 高野山大学「事業報告書(各年版)」より(各数値は大学院の学生数を除く)。
 - 19) 2011年の大幅な減少は、東日本大震災に加えて、台風12号の豪雨被害により周辺各所の主要道路が寸断されたことによるものである。
 - 20) 契約施設数は2011年、売上高は2011年4月1日～12月31日の統計である。なお、これらの統計数値は全て田辺市熊野ツーリズムビューローの提供資料に基づくものである。
 - 21) 『産経新聞』2005年6月6日付。
 - 22) ただし、観光客による環境破壊の修復という観点ではないが、田辺市TBは台風12号の豪雨被害を受けた古道の修復を目的とした「熊野古道道普請ウォーク」という宿泊つきのプログラムを2011年に実施している。このプログラムでは、参加者が古道に土を補充するほか、横断溝や側溝の清掃を実施している。
 - 23) もちろん、行政のみでなく地域住民の手により着地型観光を推進する動きもある。田辺市全体でみると、たとえば、龍神村では木材を運搬する筏流しの宿を代々営んでいた「登美屋」は、屋号はそのまに現在では山里の生活や農林業の体験をテーマとした3～4時間程度のガイド付きウォーキングを有償で実施している。
 - 24) 石見銀山の価値を広く訴え、世界遺産登録に多大な貢献をされた中村ブレイスの中村俊郎氏から、その哲学を含めてお話を伺う機会に恵まれた。
 - 25) 桑子(2002)、「発題IX」283頁以下。
 - 26) 藤田(1995)で、「不快」と「安楽」の問題が考察されている。この問題を考えるとき、三木(1978)も参考になるだろう。

参考文献

(第1章)

- (1) 石見銀山資料館編『資料でみる石見銀山の歴史』石見銀山資料館、1999年。
- (2) 石見銀山展実行委員会編『輝きふたたび石見銀山展』石見銀山展実行委員会、2007年。
- (3) 島根県教育庁文化財課世界遺産室編『世界遺産・石見銀山遺跡とその文化的景観』島根県教育庁文化財課世界遺産室、2008年。
- (4) 島根県立大学総合政策学部井上厚史研究会ゼミ学生『大学生がつくる銀山街道ガイドブック』山陰中央新報社、2011年。

(第2章)

- (5) 井上繁『日本まちづくり事典』丸善、2010年。
- (6) 大田市『統計おた／2011年度版』島根県大田市、2011年。
- (7) 小野寺浩『屋久島の作法』朝日新聞出版、2009年。
- (8) 金田章裕『文化的景観』日本経済出版社、2012年。
- (9) 柴鐵生『あの十年を語る 屋久杉原生林の保護をめぐる』五曜書房、2007年。
- (10) 末永勝介『岩崎與八郎伝』岩崎グループ、2005年。
- (11) 千葉望『500人の町で生まれた世界企業』ランダムハウス講談社、2009年。
- (12) 東京農業大学短期大学部生活科学研究所編『屋久島100の素顔』東京農業大学出版会、2007年。
- (13) 中村俊郎『コンビニもない町の義肢メーカーに届く感謝の手紙』日本文芸社、2011年。
- (14) 西村幸夫・埜正浩『証言・町並み保存』学芸出版社、2007年。
- (15) 原誠『矜持あるひとびと』金融財政事情研究会、2011年。
- (16) 深見聡・井出明『観光とまちづくり』古今書院、2010年。
- (17) 別冊太陽『石見銀山』平凡社、2007年11月1日。
- (18) 松場登美『群言堂の根のある暮らし』家の光協会、2009年。

着地型観光と地域社会

- (19) 毛利和雄『世界遺産と地域再生』新泉社、2008年。
- (20) 森まゆみ『起業は山間から』バジリコ、2009年。
- (21) 屋久島町エコツーリズム推進協議会『屋久島町エコツーリズム推進全体構想』2010年。
- (22) 屋久杉自然館『屋久島やくすぎ物語／2008年版』2008年。
- (23) 安江則子『世界遺産学への招待』法律文化社、2011年。
- (24) 渡辺悌二他「観光の視点からみた世界自然遺産」『地球環境』Vol.13、No.1、2008年。
- (25) 屋久島町ホームページ〈<http://www.yakushima-town.jp/>〉。
- (26) (公益財団法人)屋久島環境文化財団ホームページ〈<http://yakushima.or.jp/>〉。
- (27) 鹿児島県ホームページ〈<http://www.pref.kagoshima.jp/>〉。
- (28) 環境省屋久島世界遺産センターホームページ〈<http://www.env.go.jp/park/kirishima/ywhcc/>〉。

(第3章)

- (29) 柴鐵生『あの十年を語る 屋久杉原生林の保護をめぐる』五曜書房、2007年。
- (30) 長妻三佐雄「運動としての模倣 中井正一の挑戦」伊藤徹編『作ることの日本近代』第七章、世界思想社、2010年。
- (31) 林達夫『政治のフォークロア 林達夫著作集第五巻』平凡社、1971年。

(第4章)

- (32) 和歌山県高野町『(平成21年度～平成30年度)第3次高野町長期総合計画』2009年。
- (33) 和歌山県商工観光労働部観光振興課『世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道(リーフレット)』2010年。

(あとがき)

- (34) 桑子敏雄「環境的公共性の理念形成」『公共哲学9 地球環境と公共性』東京大学出版会、2002年。
- (35) 藤田省三『全体主義の時代経験』みすず書房、1995年。
- (36) 三木清「旅について」『人生論ノート』新潮文庫、1978年。

